宗尊親王の和歌

―先行歌からの表現摂取の様相―

木村　尚志

一、はじめに

和歌史において先行歌の表現を摂取するということに、文芸上の価値を与えられたのは、新古今時代の本歌取という技法の発達と密接に関わる。一方では、先行歌からの表現摂取に文芸上の価値が与えられたことで、古歌からの表現摂取は制限を受けることにもなり、また、近い時代の和歌からの表現摂取は表現のプライオリティが厳密に問われるようになった（『近代秀歌』『詠歌大概』等）。

しかし、このような先行歌からの表現摂取に対する姿勢は、同時代やその後の和歌史において普遍的であったとは思えない。例えば、既に知られているところでいえば飛鳥井雅経や源実朝の和歌は、新古今時代に設けられた先行歌からの表現摂取の制限の枠組を越えている。それらが決して特殊でないとすれば、先行歌からの表現摂取は新古今時代以降の和歌史において、どのような意義を継承していったのか。本稿では、そのことを考える糸口として、十三世紀半ば頃鎌倉歌壇の最盛期を現出させた宗尊親王の和歌における先行歌からの表現摂取について考えたい。樋口芳麻呂氏の論文「宗尊親王初学期の和歌―東撰和歌六帖所載歌を中心に―」（『国語国文学報』・昭和四四年三月号）は、彼の初学期の和歌である『東撰和歌六帖』所載歌における、先行歌からの表現摂取について論じられ、

親王は、和歌を習い始めてから、なお日が浅いにもかかわらず、古今集・拾遺集などの古典和歌、新古今・新勅撰・続後撰集などの近代・当代の和歌、更には万

葉集と、広く撰集から学び取ろうとしており、初学期の親王が和歌になみなみならぬ熱意を示し、貪欲に摂取を続けていたことが知られるのである。

と結論づけておられる。そして、その先行歌摂取の様態を見るにつけ、彼もまた前述のような制限の枠組に収まらない歌人であることは確かである。私たちは、宗尊親王の和歌における先行歌からの表現摂取を、どのように捉えるべきなのだろうか。

二、古歌からの表現摂取

まず、ここでは古歌からの表現摂取を取り上げる。

〈A〉こひそむるからあゐのきぬの色に出でてふかき心をしらせてしがな　（『文応三百首』・恋・二〇二）

戀日之　氣長有者　三苑圃能　辛藍花之　色出尓来

こふるひのけながくあればみそのふのからあひのはなのいろにいでにけり[1]

（『類聚古集』・「韓藍草部」・一六九九）

宗尊親王詠は、『万葉集』歌[2]の下二句を取っているが、その部分において文字囲いで示したように「きぬ」と「はな」の違いがある。万葉仮名「花」の訓として、「きぬ」はあり得ないので、この違いは作者が故意に行った置き換えに拠っていると思われる。この置き換えには次のような根拠があるだろう。『万葉集』の歌、

呉藍之　八塩乃衣　朝旦　穢者雖為　益希将見裳

カラアヒノヤシホノコロモアサナ〳〵ナレハスレトモイヤメツラシモ

（『廣瀬本万葉集』・巻一一・寄物陳思・二六二三・作者未詳）

の初句は現在では「くれなゐの」と訓むのが通例だが、掲出の本文の他に、『類聚古集』、『古葉略類聚鈔』、細井本などは「からあゐの」に作る。この歌の上二句の措辞は、

わがこひはやまとにはあらぬからあゐのやしほのころもふかくそめてき

（『秋篠月清集』・「院句題五十首」・「寄衣恋」・九九九）

等の新古今時代以降の恋歌にしばしば踏まえられ、「色」「深き」「染む」等の縁語による構成が見られる。当該歌は、『万葉集』・二六二三番歌と、或いはそれを摂取した後世の歌に拠って、「花」を「きぬ」に置き換えている。その「きぬ」は、「色」「そむる」「ふかき」と縁語を構成しており、「きぬ」を詠むことで個々の言葉の相互関係を活かしている。また、『類聚古集』（『万葉集』）・一六九九番歌は、長く恋しているうちにその恋心が顔色に出て周囲の人に知られたという内容である。しかし、当該歌は、顔色に出して恋心を相手に伝えた

いという気持を歌う。そこでは、周囲の人に知られてしまうということよりも、相手に伝わるということが強調されている。このような、当該歌における『類聚古集』（『万葉集』）・一六九九番歌の「いろにいづ」という言葉の意味の読み替えには、『新勅撰和歌集』の兼通の歌、

いろにいでて今ぞしらするひとしれずおもひわびつる
ふかき心を　（『新勅撰和歌集』・恋・六三八・藤原兼通）

の本歌取が介在している。こうして当該歌は、縁語を活かし、複数の古歌に寄り添う（新しく詠む歌の内容に関わる古歌に依拠する）ことで、『類聚古集』（『万葉集』）・一六九九番歌の言葉を、初恋の主題の文脈に位置づけ直している。

〈B〉ふるさとのよしのの山は雪きえてひとひも霞たたぬ日はなし　（『文応三百首』・春・一一）

ふるさとはよしのの山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし　（『古今和歌集』・冬・三二一・読人しらず）

宗尊親王詠は、『古今和歌集』歌の主たる言葉を句の配置を変えずに受け継ぐが、まず『古今和歌集』歌の初句「ふるさとは」を「ふるさとの」にしていることに注目したい。そのことで、『古今和歌集』歌の「ふるさと」は、吉野山の麓の離宮址のある一帯、或いは奈良の旧都を表すのに対し、宗尊親王詠では、吉野山を含む吉野の地全体を表すことになり、「ふるさと」の意味が変わっている。「ふるさと」「よしのの山」「雪」と読み進むに従い、大きな景から小さな景へ焦点化するように、読者の視線が誘導される。また、「ふるさと」の「ふる」、「よしのの山」と「雪」は縁語であり、歌の表の意味では「雪」は降っていないが、その言葉続きと本歌により、読者は冬の雪の降る吉野山を思い浮かべる。春を迎え霞の立つ吉野山の現在の景色に、上句の言葉続きから髣髴する冬の景色が過去のものとして重ね合わせられ、季節の移ろいを表現している。それはちょうど、良経の、

みよしのは山もかすみて白雪のふりにしさとに春はきにけり　（『新古今和歌集』・春・一・藤原良経）

という歌に、縁語の活かし方、および吉野山の冬から春への季節の移ろいを主題とする点が通じる。

〈C〉行きやらでくらせる山のほととぎす今ひと声は月に鳴くなり　（『瓊玉和歌集』・夏・一一一・「山路郭公」）

行きやらで山ぢくらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに　（『拾遺和歌集』・夏・一〇六・源公忠）

宗尊親王詠は公忠詠の主たる言葉を句の配置を変えずに受け継ぐが、二首の歌の大きな違いは、公忠詠の一首全体の主語が作中主体であるのに対し、宗尊親王詠のそれは時鳥であるという点である。公忠詠における作中主体は、宗

尊親王詠では「行やらでくらせる」という「山」に掛かる連体修飾節の中の主語となる。時鳥に焦点化し、作中主体を背景化したのである。また、結句に「月」を詠み込むことで、月に鳴く時鳥という伝統的な時鳥の歌の構図を継承するとともに、第二句の「くらせる山の」から結句の「月に鳴くなり」までの展開の中に、時の経過を表現している。こうした「月」を用いた時の経過の表現は、

またもこむ花にくらせるふるさとのこのまの月にかぜかをるなり　（『秋篠月清集』・「南海漁夫百首」・五一〇）

たづねきて花にくらせる木のまよりまつとしもなき山のはの月　（『新古今和歌集』・春・九四・飛鳥井雅経）

の二首の俤（おもかげ）に通う。ところで、当該歌について、猪苗代兼載は、

一、ゆきやらで山路くらしつ時鳥今ひと声のきかまほしさに

この心は、一声やきかむとて、今鳴きたる跡をさらで暮したるとなり。二声ときかずは出でじとあるうたも、此の歌などの心なり。宗尊親王の歌に、

ゆきやらで山路くらせる[3]時鳥今一こゑは月に鳴くなり

前の本意を、一重上をあそばしたり。人のこゝろざしをかんじて後、今一声をばけつかうして月に鳴きたるなり。　（『兼載雑談』）

と述べている。傍線部にいう本意とは、時鳥の声をもう一度聞こうとして、山路に行き暮れるという公忠詠の主題のことであろう。傍線部に「前の本意を、一重上をあそばしたり」とあるのは、前に述べたような「月」を用いた時の経過の表現によって、時鳥を待つ人の思いを歌う公忠詠の主題を深めて表現し、かつ月に鳴く時鳥の趣向をも実現したことを言っているのであろう。

以上の古歌からの表現摂取においては、本歌取の意識から古歌の世界との響き合いを志向し、一首の表現の収斂するところの趣向（以下、これを「中心的趣向」と呼ぶ）を表現する文脈に、摂取した古歌の言葉を位置づけ直している。その際、表現を摂取したところの古歌とは別の古歌に寄り添う表現や、縁語により個々の言葉の相互関係を活かす表現が見られる。そして、これら二つの表現は、ともに「中心的趣向」に直接関わっている。

三、「雅有三百首」の歌からの表現摂取

次に、宗尊親王の近臣歌人であった飛鳥井雅有の家集『隣女和歌集』巻一に収載される、雅有が正元元年中（一二五九

〜一二六〇）に宗尊親王に献上した「雅有三百首」の歌からの表現摂取の例を見たい。「雅有三百首」の中に、宗尊親王の『文応三百首』[4]の和歌と類似した表現が見られることについては、夙に先行研究において[5]前者から後者への影響であるとされている。

〈D〉はつかりの嶺とびこゆるおほひばに霜おきあまる秋の夜の月　（『文応三百首』・秋・一三一）

久かたのあまとぶかりのおほひばにはつしもふりぬあり明のそら　（『隣女和歌集』・巻一正元年中・秋・五九）

雅有詠は、『万葉集』の歌、

天飛也　鴈翅乃　覆羽之　何処漏香　霜之零黒牟[6]

そらとぶやかりのつばさのおほひばのいづこもりてかしものふるらん[7]　（『類聚古集』・巻三・秋・六六五）

に拠りつつ、その発想を転じて雁の「おほひば（覆ひ羽）」に下りた霜を詠んでいる点が新しい。雅有詠と同様の発想を詠む歌は、他に宗尊親王詠しか見当たらず、宗尊親王詠において雅有詠からの表現摂取がなされていることは確かと思われる。為家は、この「おほひば」に関し、評語で、

昔建保の比、このおほひばは、よみたる人候しかば、おそろしといふ事にて候しかども、この比はさならぬこともおほく候うへ、是は面影あまりて面白くみえ候にや

と述べている。傍線部の文言が指している具体的内容は、歌に即して分析すれば、一つは、第二句の「嶺」と結句の「月」の組み合わせの喚起する映像であり、もう一つは、深更に及んで雁の「おほひば」に置いた霜に、霜と見紛う「秋の夜の月」の光が付け加わり、まるで「霜おきあまる」かのように見える幻想的な映像ではないだろうか。一方、波線部に述べられている内容は、「新 日本古典文学大系」『中世和歌集鎌倉篇』所収の『文応三百首』の樋口芳麻呂氏の注釈に指摘されているように、おそらく建保四年（一二一六）閏六月九日の『内裏百番歌合』で藤原家衡の詠んだ歌、

ゆふぐれはかりのつばさのおほひばをもりて降りくる秋のむら雨

（『内裏百番歌合』・「秋二首」・五十六番・左持・一一一・藤原家衡）

に対する、当日の衆議に基づいて定家が執筆したとされる判詞に、

かりのつばさのしもも雪ももりくる物になりにければ其難は侍らねども、このおほひばことにえんにはきこえずや侍らむ

とあるのを指すのであろう。ただ、その二年前の建保二年八月一六日の『内裏歌合』で、僧正行意が詠んだ歌、

かささぎのちがふるはしのおほひ羽を夜わたる月のいかでもるらん

（『内裏歌合』・「秋月」・十四番左勝・二七・僧正行意）

に対し定家は判詞で「およびがたきさまのすがたことばに侍る」と述べており、「おほひば」という歌語自体の使用を否定しているわけではなかろう。定家が詠歌に用いるべき言葉を抜き書きした『五代簡要』の「万葉集」篇には、「あまとふやかりのつはさのおほひはの」と引かれている。また、この行意詠から推察されることは、中世の歌人は「おほひば」を、雁が群をなして翼を拡げ空を覆う様を表す幻想的な言葉と解していたのではないかということである。前掲の家衡詠に対する難は、この「おほひば」という幻想的な題材について何ら具体的な描写をせず、眼前の叙景に終始したことに対するものであろう。これに対して、宗尊親王詠と前掲の行意詠はこの「おほひば」を「秋月」の主題[8]を表現する文脈に位置づけ、その幻想性を強調している。また、宗尊親王詠は、第一・第二句に躬恒の歌、

おく山の嶺とびこゆるはつかりのはつかにだにもみでやみなん

（『新古今和歌集』・恋・一〇一八・凡河内躬恒）

の第二・第三句を入れ替えて置く形で、本歌取を行っている。この躬恒詠に寄り添うことで、北国から奥山の嶺を飛び越えて飛来する初雁の「おほひば」に遠く思いを馳せる体（てい）の歌となり、その幻想性を活かしている。

この宗尊親王詠に対し、雅有詠は人麻呂詠の発想を転じ「おほひば」の上に降りた霜を幻視する趣向を構えるに止まり、「おほひば」を活かす想像力の飛翔がない。二首の歌のこの違いは大きい。

〈E〉ささまくらいくののすゑにむすびきぬ一夜ばかりの露の契を

（『文応三百首』・雑・二七六）

ひとよとてかりねの丶べのさ丶まくらむすびし露のちぎりわするな

（『隣女和歌集』・巻一・正元年中・恋・一五一）

雅有詠は、『六百番歌合』の「寄傀儡恋」の題等に類する旅における恋を主題とするものであろう。当該の二首はともに「ささまくら」に寄せて、「ひとよ」の「よ（節）」「むすび」「露」等の縁語を用いている。同じような趣向・構成の歌に、

すがはらやふしみにむすぶささまくらひとよのつゆもしぼりかねつる

（『秋篠月清集』・「南海漁夫百首」・五六六・「羈旅十首」）

がある。この歌の第二句の「むすぶ」には、歌枕・伏見の言葉の響き「伏し見」からの連想で、契りを結ぶという意味が響いている。一夜の契りを結ぶ相手は人ではなく「さ

さまくら」であり、それは一夜の旅宿を取るという意を寓する。さて、当該の二首において動詞「結ぶ」はともに、上句の旅寝の枕を結ぶという羈旅の文脈と、下句の「露の契り」を結ぶという文脈の結節点となる掛詞である。宗尊親王は、こうした雅有詠の一首の仕立てに学んだのであろう。しかし、宗尊親王詠は、下句の「露の契り」を羈旅歌の文脈に即して、「ささまくら」との間に結ばれるものとした点が、人との間に結ばれるものとする雅有詠と異なる。このように旅寝の枕を結ぶことを「契り」と見立てる点は、「契り」の語こそ用いていないが前掲の良経詠や、

カリフシノ枕ナリトモアヤメ草一夜ノ契思ワスルナ　（『海道記』）

是もまたかりそめぶしのささ枕一夜の夢のちぎりばかりに　（『俊成卿女集』・「詠百首和歌」・一五七・「旅」）

ひきむすぶくさも一夜のかりまくらちぎりはかなきつゆのとこかな　（『中書王御詠』・雑・二四二・「旅歌とて」）

等、宗尊親王自身の作を含めた歌々に通う。これらの歌々において、「契り」という語には、

一樹の陰に宿るも、先世の契あさからず。同じ流をむすぶも多生の縁猶ふかし。　（『平家物語』・巻七・福原落）

等の文脈での「因縁」の意も響かされているのであろう。

また、宗尊親王の当該歌の第二句「いくののすゑに」は、

おほえ山夕すずしきたもとかないくのの末に秋やきぬらん（『建保名所百首』・「大江山丹波国」・三一四・僧正行意）

草の原いくのの末にしらるらん秋風ぞ吹くあまの橋だて　（『建保名所百首』・「海橋立丹後国」・一〇〇九・順徳院）

という先蹤に拠る。ここに歌われる歌枕・生野は、京都から大江山を越え丹後に向かう道にあり、『百人一首』の小式部内侍の歌以来、「幾野」の掛詞を用いて、その道のりの遠さが歌われている。当該歌において、この「幾野」の掛詞は、第四句の「一夜」と対照されてもいる。その対照により、上句では、遠い旅の道程の中で多くの旅寝を重ねた感慨を歌い、下句では、その一つ一つの旅寝についての感慨を反芻するという対応構造が生まれ、上下句の結節点にある「むすびきぬ」の掛詞を活かしている。それは「ささまくら」「むすび」「夜（節）」「露」の縁語と相俟って、上下句の響き合う連歌的な構成を生んでいる。

四、『新和歌集』の歌からの表現摂取

次に、宗尊親王の鎌倉歌壇と同時代に成立した宇都宮歌壇の私撰集『新和歌集』の歌からの表現摂取を見たい。これまで同時代・後世の歌人による『新和歌集』の享受の事

実は知られていなかった。[9] その成立時期については、正元元年（一二五九）八月一五日～一一月一二日の間に成立したとする石田吉貞氏、小林一彦氏、佐藤恒雄氏等の説と、正元元年七月二日までの時期に一旦成立し、それ以降弘長元年（一二六一）夏過ぎまでに切り継ぎ作業が行われたとする石川速夫氏・中川博夫氏等の説がある。[10] いずれにしても、正元元年（一二五九）中には一旦成立したことになる。宗尊親王自身は入集しておらず、その撰集に直接関与したとは考え難い。現在『新和歌集』の撰者には、笠間時朝[11]或いは西円法師が比定されている。時朝と宗尊親王の交流は、『吾妻鏡』や、家集『前長門守時朝入京田舎打聞歌』、『新和歌集』の詞書から窺うことができる。一方、西円法師は東国で『源氏物語』研究を行った宇都宮一族と思しい人物で、『異本紫明抄』初音巻の記事から後藤基政・源親行・東胤行など宗尊親王に縁ある歌人との交流が窺え、少なくとも間接的には宗尊親王との接点はあったと思われる。宗尊親王の『新和歌集』の歌からの表現摂取は、その成立直後の文応元年（一二六〇）一〇月六日以前成立の『文応三百首』に早くも見られる。この早さに鑑みて、撰者が直接或いは間接に宗尊親王へ『新和歌集』を献上したのであろう。

まず、前述の『文応三百首』における例である。

〈F〉あだにちる花よりも猶はかなきはうつろふ人の心なりけり

（『文応三百首』・恋・二六六）

風にちる花よりもなをはかなきはおしみし人のいのちなりけり（『新和歌集』・哀傷・四八六・平光幹・「だいしらず」）

光幹詠の、花に生前それを惜しんでいた亡き人の命を重ね合わせる発想は、

さくら花をしみし人をわすれずはたづねてもさけしでの山べに

（『道命法師集』・一六二・「人のうせたまへるところの花をみて三首」）

といった先例がある。しかし、散る花を惜しんでいたまさにその人の命のほうが、散る花よりも儚かったという逆説的表現は、おそらく実感に基づいたものであろう。それに対して、宗尊親王詠は、「うつろふ人の心」と花を対比している。『古今和歌集』の小町詠、

色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける

（『古今和歌集』・恋五・七九七・小野小町）

や、これを踏まえた、

色見えでうつろふ人の心より花はつれなき物としりにき

（『洞院摂政家百首』・「遇不逢恋」・一三三一・藤原成実）

の二首の歌は、人の心が信頼しがたく移ろうことを言うた

めに花を持ち出す発想に基づく。宗尊親王詠は、この発想を受け継いでいる。たとえ直接的には成実詠に拠ったにせよ、読者は必ずや小町詠を想起するであろう。この小町詠に寄り添うことで、実情を歌う哀傷歌から、短い間に変わりゆく人の心の儚さを主題とする恋歌へと変えている。また、初句の「風」を「あだ」に変えたことで、「花」と「あだ」「うつろふ」が縁語になっており、個々の言葉の相互関係を活かしている。

〈G〉ゆめはなをむかしにまたもかへりなむふたゝび見ぬはうつゝなりけり

（『柳葉和歌集』・「弘長元年五月百首歌」・雑・六六）

くれ竹のみじかき夜半の夢よりも見はてぬものはうつゝ成けり

（『新和歌集』・哀傷・四九四・有尊法師・「百首歌に」）

「うつゝ」を「見る」という言い方は珍しく、当該の二首の他に、為氏の、

見ても又たのむにつけてはかなきは夢にまさらぬうつつなりけり　（『弘長百首』・六七七・藤原為氏・「夢」）

という、宗尊親王詠より後に詠まれた歌が見当たる程度である。有尊法師詠の「うつゝ」を「見はてぬもの」（終わりまで見届けられないもの、の意）とする発想は、夢を「見はてぬもの」とする類型に反している。また、この歌での「夢」と「うつつ」の対比は、一般的な意味での対比ではなく、死に臨んで振り返る一生の時間を表す「うつつ」を「夢」より短いとすることで、その儚さを強調するための対比である。それに対し、宗尊親王詠は小町の歌、

夢ならばまた見るよひも有りなましなに中中のうつつなりけん　（『小町集』・八二）

を踏まえていると思われ、一般的な意味での「夢」と「うつゝ」の対比に主題を変えている。ただし、「また見る」ことの可能性の有無で「夢」と「うつゝ」を対比する歌は、小町詠以外に先行歌は見当たらない。しかし、当該歌の少し後に編まれた『続古今和歌集』には、この宗尊親王詠と小町詠が入集し[12]、宗尊親王詠の次には、

うつつこそなほうかりけれゆめならばこふるむかしを又も見てまし　（『続古今和歌集』・雑・一八〇四・藤原行家）

という小町詠を本歌取した歌が排列されている。このことは、当該歌の同時代において、小町詠を拠り所に、前に述べたような主題が共同性を形作ったことを示していよう。当該歌は「うつゝ」を「見る」という有尊法師詠の特殊な措辞を取り入れながら、古歌に寄り添うことで、それを共同的に享受され得る主題の文脈の中に位置づけたのである。

このように、近代の歌からの表現摂取は、詞遣いや一首の仕立てといった表現上の側面を中心とし、古歌の場合のように、新しく詠まれる歌の「中心的趣向」に直接関わらせての摂取ではない。そこで注意されるのは、何らかの新しさを持った表現が摂取されているということである。その意味について、稿者は未だ定見を持ち得ていないが、少なくとも本稿で取り上げた「雅有三百首」や『新和歌集』の和歌からの表現摂取についていえば、東国の和歌活動の場における共同性の問題が関わることは確かであり、その観点から改めて考察する必要がある。また、古歌からの表現摂取の場合と同じく、新しく詠まれる歌の「中心的趣向」に関わって、古歌に寄り添うことや縁語により個々の言葉の相互関係を活かすことがなされている。

五、先行歌摂取における縁語と古歌への寄り添い

AからGの宗尊親王の歌々について指摘してきたことのうち、二つの側面に着目したい。まず一つは、縁語により先行歌から摂取された言葉を含む個々の言葉の相互関係が活かされていることである。説明のため、いま一つ事例を挙げたい。

〈H〉いでてみるむかひの岡のかがみ草露にみがける月のかげかな　（『文応三百首』・雑・二八六）

かたばみのそばにおひたるかがみ草露さへ月に影みがきつつ

（『夫木和歌抄』・巻二八・鏡草・一三六一九・藤原為家・「貞応三年百首」）

当該二首においては、鏡草という言葉が一首全体の中で果たす役割が全く異なる。為家詠の第三句以下は、鏡草の上に置く露までも月光により鏡のように輝いているの意だが、第四句の「露さへ月に」の副助詞「さへ」によって暗示されているのは、鏡草それ自体が月光により鏡のように輝いていることである。それは具象的な鏡の比喩に基づいて、一首の主題として歌われている。こうした為家詠での「鏡草」の役割に対し、宗尊親王詠でのそれは、結句の「月のかげ」を引き立てるものとして背景化している。そして、その名の含む「かがみ」の語が、上句の「むかひ」、下句の「みがける」、「かげ」と縁語であることで、上下句を言葉の上で結びつける媒介となっている。

また、当該歌の「むかひの岡」は、『万葉集』に見える歌、

イデ、ミルムカヒノヲカノモトシゲクサキタルハナノナラズハヤマジ

（『廣瀬本万葉集』・巻一〇・春相聞・一八九三・柿本人麻呂）の上句に拠っている。この『万葉集』歌の「ムカヒノヲカ」からその「ムカヒ」と縁語である「鏡」を名に負う「鏡草」の語を手繰り寄せることで、古歌に寄り添いつつ新たな叙景表現として別様に展開させているのである。

宗尊親王詠では、為家詠と『万葉集』歌の二首の歌の言葉が新しく詠まれる歌の文脈に即して読み替えられており、縁語はこの言葉の読み替えの根拠となっている。

もう一つは、同様の理由から古歌への寄り添いに着目する。例えば、Aの宗尊親王詠において、初恋の主題に即して『類聚古集』（『万葉集』）・一六九九番歌の「花」を「きぬ」に置き換え、また、同じ歌の中の「いろにいづ」という言葉の意味を読み替えていく過程に、それぞれこの『類聚古集』（『万葉集』）歌とは別の古歌への寄り添いが介在し、言葉の意味の読み替えの根拠となっていた。D、F、Gの事例においても同様のことを指摘した。

このように、先行歌からの表現摂取において、縁語と古歌への寄り添いが先行歌の言葉の読み替えを正当化するのはなぜであろうか。まず、縁語は、偶然に居合わせた個々の言葉が、三十一文字の和歌の定型の中で相互に結び付くことで、あたかもそれらの言葉が必然的に選ばれたかのように見せる。一方、古歌への寄り添いにおいて、新しく詠まれる歌の中で、古歌と表現を摂取するところの先行歌は偶然出会うにも拘わらず、その出会いは、やはり定型の中に収まることで必然化される。すなわち、先行歌の言葉の読み替えにおいて、縁語と古歌への寄り添いは、三十一文字の定型の中で、本来結びつかない二つ以上の要素を自然な連想を通じて結びつける機能を果たすのである。

六、おわりに

さて、二節で見た古歌からの表現摂取では、その古歌の世界との響き合いが志向されており、本稿で取り上げた多くの歌々に見られる古歌への寄り添いにおいて、その古歌は新しく詠まれる歌の「中心的趣向」に関わっている。冒頭に述べたように、宗尊親王は和歌初学期から先行歌からの表現摂取を盛んに行った。古歌を新しく詠まれる歌において一つの表現の枠組としていくこのような態度は、「中心的趣向」に向かい合う心を古歌を通じて歌人が体得していく和歌の「まねび」と密接に関わるのではなかろうか。山岸徳平氏の論文「宗尊親王と其の和歌」（『国語と国文学』・昭和二二年一二月号）には、源実朝と宗尊親王の「万葉調」の和歌の違いが述べられている。その論旨は、「親王の万葉調

の習得は、あえていえば、実朝のそれが、感情を通過してのの体得であったのに対し、作歌のために分析的に読んでいくことによる、知性を通しての理解であった。宗尊親王の師であった為家とその父定家も理解の側の人であった」と要約される。この山岸氏の見解は、宗尊親王の万葉調の歌に限らず、彼の先行歌からの表現摂取全般に敷衍できるのではないか。知性を通した和歌の「まねび」の痕跡が作品の上に具現しているのが、宗尊親王の先行歌からの表現摂取の特徴である。その営為は、享受と創作が表裏一体となった地平に位置づけられる。紙幅も尽き詳述することはできないが、『文応三百首』の為家と基家の評詞や『中書王御詠』の為家の評詞に目立つ本歌や先行歌に関する記述も、宗尊親王の和歌に対する同時代の評価基準の一端として注意される。当時の和歌のあり方やその後の和歌史において、そのような先行歌からの表現摂取のあり方がどう位置づけられ、また、どのような意義を持ったのかという問題は今後の課題とし、ひとまずここで筆を擱きたい。

〈付記〉

本稿は、平成一八年七月和歌文学会例会（於東京大学）における発表に基づき、大幅に加筆・修正したものである。席上、御教示賜った先生方に、この場を借りて心より御礼申し上げる。

＊本文中に引用した和歌は、後掲の諸文献中の歌集・歌合以外は、歌番号および本文とも『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。但し、私意に表記を改めた箇所がある。

『新和歌集』：天理図書館蔵本（小林一彦「校本『新和歌集』（上）」「同（下）」に基づいて、他本と校合を行い、適宜校訂を施した）／廣瀬本『萬葉集』：『校本萬葉集』別冊一～三／『類聚古集』：龍谷大学善本叢書二〇『類聚古集　影印・翻刻篇・上』（思文閣出版）／『兼載雑談』：『日本歌学大系』・第五巻（風間書房）／『五代簡要』：冷泉家時雨亭叢書・第三七巻『五代簡要・定家歌学』（朝日新聞社）／『海道記』：「新 日本古典文学大系」『中世日記紀行集』（岩波書店）／『柳葉和歌集』：冷泉家時雨亭叢書・第三一巻『中世私家集七』／『中書王御詠』：同上／『隣女和歌集』：中川博夫「歴博本『隣女和歌集』翻印」（『鶴見大学紀要』・四三号第一部　平成一八年三月号）／『隣女和歌集』巻一：中川博夫「桃園文庫本『隣女和歌集』巻一翻印・解題」（『国文鶴見』・第四〇号・平成一八年三月号）／『平家物語』：「日本古典文学全集」『平家物語』（小学館）

【注】

（1）第四句「かまあひの」とあり、「ま」を見セ消チにし、「ら」と傍記する。

（2）当該歌の本文を『類聚古集』で掲げたのは、『万葉集』の底本とした廣瀬本の欠脱部分に当たるためである。以下の同様の場合にも、『類聚古集』に拠る。

（3）『瓊玉和歌集』本文との間に、第二句の異同があるが、『兼載雑談』本文では上句の主語も時鳥になってしまい、地の文の主旨にも反することになる。また、『瓊玉和歌集』本文に、当該箇所の異同は無く、『兼載雑談』本文の誤写等の事情を想定したい。

（4）依拠した『新編国歌大観』では『宗尊親王三百首』の書名であるが、ここではより一般的に用いられる『文応三百首』の書名を用いることとする。

（5）谷山茂「宗尊親王の文応三百首と未刊百首―『続百首部類』考―」（上）（下）（上）：『女子大国文』・昭和五一年一二月号、（下）：同上・昭和五二年六月号）、中村光子「宗尊親王『三百首和歌』と『隣女集』」（『日本文学研究（大東文化大学）』・平成二年二月号）

（6）『校本萬葉集』に拠ると、第二句の「雁」の下に他本は全て「之」が入り、また、結句の「黒」は他本の本行本文は全て「異」に作る。

（7）初句の「天」を「そら」と訓むのは『校本萬葉集』に拠ると、当該本文以外では元暦校本のみで、それ以外は「あま」と訓まれている。また、元暦校本は右に赤字で「アマトフヤ」と傍書する。

（8）宗尊親王の当該歌は、『文応三百首』「秋 七十首」中の「秋月」の歌群の冒頭に位置する。

（9）本節で取り上げる歌々以外にも表現上の類似は見いだせる。以下、列挙する。尚、『新和歌集』の出典表記は省略し、歌頭に▽**を付す。知らざりき**我が玉の緒はながらへてあひみし中の絶えん物とは（『文応三百首』）▽**をしからぬ**我玉の緒はながらへてあひみし事ぞたえはてにける（顕信法師女）／あしほ山花さきぬらしつくばねのそがひにみればかゝるしら雲（『柳葉和歌集』・「弘長元年五月百首歌」）▽あしほやま花やさく覧つくばねのそがひに見えてかゝる白雲（平幹時）／草葉こそしほれてほさぬ秋ならめなどわがそでのつゆけかるらん（『柳葉和歌集』・弘長二年九月弘長百首題和歌）▽草ばのみ露けかるべきあきぞとはわがそでしらで思ひけるかな（藤原景綱）／五月雨のくものいづくをやどりにてありかもみえぬ月のゆくらん（『柳葉和歌集』・「弘長二年十一月百首歌」）▽さみだれの雲のいづくにいでぬらんこよひはまたぬ山のはの

月（大中臣能範）／いつよりか秋のもみぢのくれなゐになみだの色のならひそめけん（『柳葉和歌集』・「文永元年十月百首歌」）▽**かり啼て萩のした葉の色づくはわが袖よりや**ならひそめけん（蓮生法師）／をとづれてさびしきものはやまざとのねざめにかゝる松のゆきをれ（『中書王御詠』）▽**吹きまよふ**あらしの風にたぐひきてね覚にかゝる秋のむらさめ（藤原景綱）／いとふべき心ひとつのあらましに身の行すゑぞなぐさまれける（『中書王御詠』）▽**なにとなき**こゝろのうちのあらましもなぐさむほどぞなぐさまれける（有尊法師）／今かかる涙にみんと思ひきや宮古の空の秋のよの月（『竹風和歌抄』・「文永三年百五十首歌」）▽**むそぢまで**みるべき物と思きや心の外の秋のよの月（藤原時家）。また、紙幅の都合で挙げられないが、飛鳥井雅有も『新和歌集』の和歌からの表現摂取を行っている。

(10) 石田吉貞「宇都宮歌壇とその性格」（『国語と国文学』・昭和二二年一二月号）、中川博夫「〔研究ノート〕『新　和歌集』成立時期小考」（『三田国文』・昭和六一年二月号）、佐藤恒雄「新和歌集の成立」（樋口芳麻呂編・『王朝和歌と史的展開』・平成九年一二月・笠間書院）、小林一彦「二つの宇都宮打聞―『新和歌集』成立の経緯と撰者を探る―」（山田昭全編・『中世文学の展開と仏教』・平成一二年一〇月・おうふう）、石川速夫『新式和歌集』解題（昭和五一年一〇月刊・二荒山神社）

(11) 〈笠間時朝説〉石田吉貞「宇都宮歌壇とその性格」（『国語と国文学』・昭和二二年一二月号）、佐藤恒雄「新和歌集の成立」（註10）、佐藤恒雄「新和歌集の成立（続）」（『香川大学国文研究』・平成九年九月）／〈西円法師説〉小林一彦「新和歌集撰者考―西円法師をめぐって」（『三田国文』・昭和六三年六月号）、小林一彦「二つの宇都宮打聞―『新和歌集』成立の経緯と撰者を探る―」（註10）

(12) 宗尊親王詠は、雑部・一八〇四・「題不知」、小町詠は、恋部・一一八九・「（恋歌とてよめる）」。また、宗尊親王詠は『瓊玉和歌集』・四九三に、小町詠は『秋風和歌集』・八五九にも入集しており、こうした近い時代の撰集類から撰ばれた可能性もある。